

## おわりに

本報告のまとめとして、調査結果から得られた日本への示唆を考えたい。

### 1. ホームスクーリングを義務教育として認める国の特徴からわかること

本科研の対象となった国では初等・中等教育段階では基本、どの国においても義務であり、出席を前提としている。学習権宣言にも児童の権利条約にもうたわれており、すべての児童が平等に質の高い教育を受けられることが SDGs の目標のひとつでもある。しかし、保護者の教育権を尊重して、また児童生徒の心身の状態に配慮してホームスクーリングが合法化されている。

ホームスクーリングを義務教育として認めているアメリカ、カナダ、ロシア、インドネシア、そしてタイの間には共通点がある。これらの国では、すべての児童生徒の学習権を保障していこうとすると、大きく2つの障壁に出会う。それらは①地理的な障壁と②多民族国家が向き合う障壁である。

まず地理的な障壁について説明する。インターネットの情報によると<sup>1</sup>、これらの国の国土の広さを日本と比較すると、ロシア 45 倍 カナダは 26 倍、アメリカは 25 倍と続く。世界の広い国トップ3である。タイは山岳民族が多く住む国である。アムネスティ・インターナショナルによる情報では、タイの山岳民族は全人口の約 1.5%だが実数にすると 93 万人だそうである。インドネシアは島が多い国で水上生活者がいる。彼らの中には国籍がない人達もいるそうである。

そしてこれらの国に共通するのは、多民族国家だということ。公教育を通した一つの価値観で統合しようとしても、必ず、異なるライフスタイル、宗教、価値観の人達が存在して、一筋縄ではいかない。タイの山岳民族も 9 民族もの人達がいるそうである。教育に関しては親の教育権を認め、子どもにとっても家族にとっても最善と判断できる教育形式を尊重せざるを得ない側面がある。国際的な「万人のための教育」の完全な実現は学びの場の多様性と柔軟性を認めずして困難である。

### 2. ホームスクーリングに踏み出す理由

ホームスクーリングは強制されて実施する教育形態ではなく、基本、保護者からの申請があって合法的に成立する。本科研で見てきた国々に共通して保護者がホームスクーリングに踏み出す事情があった。いじめ、差別、学習不振、教師との人間関係など、どの国の場合も共通していたのは、学校の環境・安全や教育の質に対する不安や不満である。気軽に学校を出るのではなく、踏み出すまでにそれなりのプロセスがある。日本でもいじめ、暴力が増加傾向である。ロシアの報告で示されたように、ウクライナ侵攻下のロシアにおいても、学校教育に対する不満があった。ホームスクーリングをしようと決断するような社会の状況があることを私たちはしっかり受け止めなければならないだろう。

### 3. 一定の歯止め

安易にホームスクーリングを始めないように、一定の歯止めも必要だ。多様な親のライフスタイルや価値観の下、子どもに対する虐待や、子どもがヤングケアラーになってしまい現代社会で必要な学びができない状態にならないように、申請の際に一定の規制や審査も必要である。限定的に認めている国はもちろん、限定しないで認めているアメリカでも、申請時に審査があったり、一定のチェックがあったり、宣誓書の提出などがある。それぞれの国や地方自治体でどのような対策を講じているか報告書をご覧ください。

### 4. 分断と統合の問題

学会でも議論されてきたのは、ホームスクーリングなどのオールタナティブ・スクールの容認は社会の分断を招来する、あるいは拡大するのではないかという懸念である。特にホームスクーリングは学習が適切にできず、社会に包摂されにくく、阻害されていくのではないかという懸念である。我々が調査した国でも、政府がホームスクーリングを積極的に推進しているわけではない。しかし、ホームスクーリングに関しては、我々の調査では、必ずしもハイスクールや大学に進学していけないわけではなく、むしろ、ホームスクーリング中に培われた自主性や主体性が高等教育で歓迎されるとする情報もあった。アメリカではハーバード大学でもスタンフォード大学でもホームスクーラーを受け入れている。初等・中等段階でホームスクーリングだった児童生徒もやがてハイスクールや大学で社会のメインストリームに統合されていくのである。むしろ、日本のように制度化していない方がかえって学校に行けない期間の学習の遅れや履歴が不利になり、「ひきこもり」などにつながりやすいのではないだろうか。

カナダの分析では、児童生徒自身の中でホームスクーリングと公立のオンラインプログラムの統合の可能性が示唆された。インドネシアでは、義務教育の3つのラインを移動していきけるシステムが提供されていた。一見、分断と見える状況でも、柔軟な制度があれば、移っていくことができる。

何より気になるのは、統合や分断の前に、合法であろうがなかろうが、ホームスクーリングが認められていない国でも法令で定められた正規の学校から出て、ホームスクーリングする人たちがいることだ。マレーシアでも、韓国でも、そして日本でも公的に認められていないホームスクーリングはあるが、黙認されている。また、アメリカのように、ホームスクーリングが制度化されていても、学校を欠席する児童生徒が非常に多数いることだ。いじめや学習不振、あるいは差別で苦しみ、悩んでいる児童生徒とその保護者に、社会の統合や分断、さらには民主主義まで考えて自らの学習の場を考えよというのは無理な話である。精神的な状態でいったんは学校の外に出たとしても、必須となる共通の学びをし、それが公的に認められ、やがて高等教育や職業を通して大きな社会に無理なく合流できる道筋がついているかが重要なのではないだろうか。

## 5. グローバル化・デジタル化の波

グローバル化の波は欧米の価値基準を運んできた。教育も例外ではない。インドネシアの論考で服部が紹介するように、アジア諸国のホームスクーラー達にはアメリカやイギリスの教育内容を学び、将来は欧米の大学で学ぼうとしている人達もいる。アジア諸国のいくつかでホームスクーリングは海外に本部を持ち、特定の欧米諸国の学習を提供する国際的な教育プロバイダーに影響されやすい状況にある。プロバイダーによる教育方法の多くがオンラインである。コロナ禍によってオンライン学習に対して社会全体の抵抗感が低くなってきたことも追い風になっている。一般的にアジア諸国では欧米諸国への海外留学は評価されやすい。ホームスクーラーにとっても有利な機会を提供してくれるものかもしれない。しかし、インドネシア担当の服部も、また韓国担当の石川も、ホームスクーリングする若者が「共通の基盤」として母国の文化に根づいた学びの機会を失い、自らの文化的基盤の弱体化を招いたり、母国から構造的に疎外されたりする状態を懸念している。

## 6. 「共通の基盤」

グローバル化と技術革新で年々強くなってきているデジタル化が進んでも、「共通の基盤」を形成していける教育の在り方はどのような形なのだろうか。調査対象の国々では、法律で規定される公立学校の学習内容や基準がよりどころになっていた。各国の学習科目はPISAなど国際的な学習評価の影響もあり、ますます似通ってきている。公立学校の学習内容は国際的な学習基準ともなりつつある。そう考えると、ホームスクーラーも、公立学校の学習内容に従うことによって国際的に通用する学習基盤、そして「共通の基盤」の一面を持つことになるのではないだろうか。しかし、重要ではあるが、一面にすぎないかもしれない。

## 7. 日本への示唆

ホームスクーリングを考える際、少なくとも4つの視点が重要だと考える。1つはセーフティーネットとしてのホームスクーリングである。不登校になってしまう児童生徒のための施策としてのホームスクーリングである。

第2に、多様な人々を包摂できる制度を考える視点である。グローバル化によって世界中の人々が来日している。日本はもう既に民族が均質的な国家ではなくなりつつある。世界中から多くの人々が働きに来ている。彼らの子どもさんたちの教育をどうするのが当該児童の家族みんなにとっても良いのか、家族の思いを尊重して寄り添わねばならない。単純に日本の教育を押し付けるわけにはいかない。後々、家族や親せきとコミュニケーションもとれない状態になってしまう悲しい状態に追い込まれる子どもたちがいるのだ。ホームスクーリングで母国の教育を受け、何年か後には母国に帰るという選択肢があっても良い。ただし、学習とその質が保障されるように公的な役割は果たさねばならない。

第3に、日本人の子どもが家族と一緒に海外にしばらく滞在することになった場合、現

地校で現地の子どもたちと学ぶ経験をしながら、自宅では日本政府からの通信教育などで学べる体制と法整備が必要である。この制度はかなり以前から既にできている。ただ、現地の学校で学ぶことが容易でない場合もあることを考えておく必要がある。

第4に、有事の際に子どもたちがどこにいても、日本語で初等・中等教育の基礎を学べるような備えも重要であろう。対面の教育の質はオンライン学習と比べることはできない。しかし、コロナ禍や戦時の時のように、どうにも対面で集まらない時もある。オンラインによる学習とコミュニケーションの質（テクノロジー、方法両面で）を日常的に上げていき、どこに疎開していても学習を保障できる体制と心構えは必要だ。

以上、ホームスクーリングの様々な側面について報告したが、本報告書が日本の公教育制度の次の発展につながる研究に寄与できるよう祈っている。読者の忌憚のないご意見をお聞かせいただければ、執筆者一同、大いに光栄と感じ、励まされる次第である。

#### <謝辞>

カナダの研究で多大なお力添えをいただき、論文の転載をご許可いただいた名古屋国際工科専門職大学の山本修一郎先生に感謝いたします。文理融合した、かつ先進的手法による論文でした。また、各国の調査においてご協力をいただいた皆々様に紙上でお礼を申し上げます。皆様のご協力がなければ、本報告書は完成しませんでした。最後に、本報告書作成に至るまでに研究助成を通してご支援くださった学術振興会に感謝いたします。

研究代表者 中島千恵

---

<sup>1</sup> あすなろ学習塾「面積の広い国」 [https://gakusyuu.shizuoka-c.ed.jp/society/kyoutsu/sekaino\\_kuniguni/11\\_mensekino\\_hiroikuni.html](https://gakusyuu.shizuoka-c.ed.jp/society/kyoutsu/sekaino_kuniguni/11_mensekino_hiroikuni.html)

(2025年3月17日アクセス)